人生と言う迷路

ポポス３世

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生と言う迷路

【Ｎコード】

Ｎ４８０１Ｇ

【作者名】

ポポス３世

【あらすじ】

この物語の主人公河上大和は謎だらけの人物です。元不良の仲間思いの恋愛にはさらさら興味無しの主人公。実は三国志より戦国時代に詳しかったりする。

プロローグ

此処は聖フランチェスカ学園。

俺の名は河上　大和。此処の２年生だ。

この学校は元々お嬢様校だったがここ数年前男女共学になったのだ。

今俺が居るのは歴史資料館。

大まかに言うと三国志や戦国時代などのレプリカやら本物やらごっちゃ混ぜだ。

理事長が課題宿題を出して皆資料館にある資料見てまとめろっていうメンドーな宿題を出して結構人が多い。

でもそんなモン俺はとっくの昔に終わらせてるよ。え？何で俺が此処にいるか？だって？

それはな・・・・此処の自販はこの学園の中じゃ一番金がかからねえから？簡単な理由だ。

しかも此処の学生証見せればタダで中に入れると言う此処の学生にとってはお得なシステムなのだ！！

ん？あれに見えるは・・・・・

「やっぱ歴史オタクやなぁ～かずピー」

「そうかもしれないかもしれないだろうが、それはそれで良いんじゃねーの？」

及川が頷く。そして隣にいる俺に驚いた。

「なんや、やまピーか脅かすなよ・・・・」

「お前ってごく●んのヤ●クミか？」

俺の隣にいる親友北郷　一刀が言う。

「まっ俺元不良だしな。ある程度の奴等なら負けねえよ」

「恐ろしい事言うなややまピー」

「それより大和も課題のどれにするか見に来たのか？」

「いいや、んなモンとっくの昔に終わらしてる」

俺は缶コーヒーの蓋を開ける。

「じゃー何で此処に居るんだ？」

俺は缶コーヒーを指差す。

「このコーヒー学園内じゃ此処が一番安いんだよ。だたそれだけそれに入場料タダだしな」

「なぁ～やまピー」

及川が目を輝かせている。

「断固拒否する。」

「何も言うてないやん」

「お前のこったどうせレポート見せてくれ～とか言うんだろ？」

及川が後ずさる。俺は飲み終わったコーヒーを缶入れに投げる。ナイスショット！

「そういや及川お前また女変えたんだって？確か相手は桜坂高校の前田さんだっけ？」

「グサッ！！」

「大和、それは前の前の付き合っていた女の子だ。」

「いつ別れたんだ？」

「2週間前。」

「次の恋早いな・・・・」

及川は資料館の隅で泣いている。

「そういや大和お前は恋愛とか興味ないよな。」

「ああ、俺はンなモンより仲間、ダチと楽しく過ごせりゃー俺には十分だ」

「やまピー、それは男にとって悲しい事やで」

「うるせーほっとけ俺の人生だお前に言われる筋合いはねー」

「ところで大和はレポート何書いたんだ？」

「戦国時代。」

「此処にも歴史オタクがいたで」

「歴史のテストが赤点の奴に言われたくねー」

まっあんまし否定できねーけどな。

此処は寮だが俺の部屋には戦国●双があるあと無双オ●チとかね。

「ん？どうしたんだ一刀？」

「ああ、アイツがなちょっと気になってな」

俺はそっちの方向に視線を向ける。其処には見慣れない此処の男子学生が居た。

「あ～さっきかずピーにぶつかった奴やな」

「あんな奴この学校にいたか？」

俺はあんな奴見たことがないしかもこの学園は男子は一クラス一人しか居ない。全学年でも数え切れる位だ。

「だが、アイツかなり強いぞ外見からして成人してる位だ。あんな体つきした奴は俺等高校生じゃありえない」

「分かるのか大和？」

「まあな、俺のジジイに紹介された剣術かとか格闘家の雰囲気に近いが、殺気が混じってるな」

「一番気になるのは今にもあの銅鏡を取りそうにな事だな」

「ああ。」

「そんなんどうでもいいやん次いこう次。」

そうして全て見終わった俺達は資料館をでて直別れた。

・・・・・・・

「ふ～今日のバイト終わりっと。」

俺は原チャリに乗りバイト先から寮に戻る。辺りは真っ暗だ。

資料館前に来るとなんか警報がなっている。

そして振り向くと前に二人の男がいた。

ドォォォォォォォォォン

「いつつやべーよ人引いちゃったよオイ。どーしよ・・・・」

「あっ大和助かった。もうちょっとで死ぬとこだった。」

どうやら一刀は引かなかったらしい。　・・・・と言う事は・・・・・・・！！

もう一方は昼間の謎の男だった。

「クソッ次から次へともういい貴様も死ね！！

鋭い蹴りが俺に向かってくる。

「うわっ、こうなったら正当防衛だし使ってもいいよな。」

俺は征服の胸ポケットから長い針の様な物（護身用）を出した。簡単に言うならば仕事人が使っているアレである。

「大和、お前ンなモン何処から出したんだよ」

「ちっまさかこんな奴がこんな所にいるとはな計算外だ」

明らかに俺の防戦なんだが針で蹴りを防いでいると言うのもギリギリだ。

「一刀コレを下に投げつけろ！！」

俺は一刀に丸薬な物を渡す。

「何だコレ？」

「使ってみれば分かる」

一刀は丸薬を下に投げた。すると丸薬は爆発し煙が上がった。

「大和様手作り特性煙玉。今だ銅鏡を取り返せ一刀！！」

一刀は謎の男に殴りかかる。その瞬間男の手から銅鏡が落ち。

割れた。

「あああああ！！コレ盗む位だかた本物！！」

「どけぇ！！」

一刀は男に飛ばされる。

「・・・・くそ余計な手間掛けさせやがって！」

「「何いってんだよテメエ第一テメエが盗まなきゃこんな事にならかったんだよ」」

「何も分かってない奴等がペラペラ喋ってんじゃねえ！」

「お前が泥棒だって事位・・・・・」

割れた銅鏡から光が漏れ出した。

「チッもう始まりやがった」

「なんだよこれ、どうなってるんだ」

「クソッ身動きとれねえ」
次第に光は広がり意識が遠くなっていく。
「無駄だ・・・」
「・・・・もう戻れん幕は開いた」
「テメエ何訳分からん事言ってんだ！！」
「飲み込まれろ！それがお前達に降る罰だ！」
話を聞いてるとだんだんムカついてきた。なんかコイツ殴りてえ。
俺は胸ポケットにあった吹き矢を男に向け吹いた。
「ざまーみやがれ」
「まだ動けたとはな・・・・この・・・世界の真実をその目で・・・・・見るがいい」
吹き矢に仕込んでおいた痺れ薬が効いたらしい。
そして次の瞬間光は何もかも包み込んだ。
俺はそこで意識が途絶えた。

プロローグ（後書き）

この物語の主人公。
モデルは特に有りませんが歴史上に出てくる人物の子孫です。
河上で気付いた人はいたでしょうか？
一応大和君のご先祖様は幕末最凶の人斬り河上彦斎の子孫と言う設定なのです。
河上彦斎を知らない人はネット検索して見て下さい。

それではまた。
ありがとでした。

第一話　出会い

桃の花が咲いているある山。

その山中にフードで姿を隠した者二人。

「そろそろ出てきたらどうだ。」

一人がそう言う。

そう言うと気の陰から山賊が４，５人現れた。

「此処は俺達の縄張りだ通して欲しけりゃ金目のもの置いていきな」

「まったく、世も末だな。姉者は下がってて下さい。」

そう言いながらフードを取ると其処には黒髪の少女が立っていた。

もう一人は後ろに下がる。

山賊の一人がリーダー格の人間に話す。

「アニキもしかしてコイツ黒髪の山賊狩りじゃー」

「なんだそりゃ？」

「知らねーんですかい？あっちこっちの山で襲い掛かる山賊を返り討ちにしている黒髪の美しい武芸者がいるって最近噂になってますぜ」

「だからってびびる事はねぇ」

「やれやれ、我が名は関羽。民を苦しめる悪党共め、これまでの悪行を地獄で詫びたければ掛かって来い！！」

数分後。

「愛紗ちゃんお疲れ様。」そう言ってフードを取ったもう一人は桃色の髪の少女だった。

「姉者、何時になったら世は平和に成るのでしょう？」

「そのためにも私達が立ち上がって天の御使い様を探すんでしょ。」

「はい、ん？姉者アレは何でしょう？」

光が荒野に落ちていく。

「流星だね。もしかして天の御使い様が降りてきたのかも、行ってみよう愛紗ちゃん。」

「はい、姉者。」

荒野

「ん？あれ？此処何処だ確か俺はバイト帰りで泥棒引いてんで鏡が割れて気が付いたら此処に・・・・・そういや一刀は何処だ？おー

ーーーい一刀ーーーーーーー！！あっそうだ携帯。」

俺はポケットから携帯を取り出し一刀に掛けようとする。が電波の表示部分に信じたくない二文字が・・・・・

（圏外）

「マジかよ・・・・」

俺は辺りを見渡すすると近くに原チャリと信じられない物があった。

「コレって家の家宝の黒龍、白龍、龍神、山河崩斬刀（超刀）じゃねーか」

家の家宝はこの他にも倉に２０は有るだろうと言うよりのこんなに数じゃ家宝って言わないんじゃないのか？

黒龍は刃が黒い、白龍は反対で白い、龍神は気持ちほど長い柄に龍が巻きついている。

「あのー」

「はい、なんですか？」

「この辺に流星が落ちてきませんでしたか？」

桃色の髪の少女が俺に恐る恐る聞いてくる。俺・・・今不良に見える？

「いや、俺ずっと此処に居たけど知らないぜ、もし隕石とか落ちてきたらクレーター位できるだろうし」

「いんせき？くれーたー？」

少女は不思議がっている。そんな難しい事いったかな俺・・・・

「それよりお主、女で俺と言うのはどう言うものだろう？」

黒髪の少女が言う。

え？女で一人称俺？ひょっとして俺の事言ってんの？俺ってそんなに女顔か？・・・・・

そういや入学当初、及川にナンパされた事あったけ、あんときは俺私服だったから間違えたんだろうけど、次の日、男子制服着てた俺を及川が見て顎外す位口開けてたの傑作だったなそんで「残念でした、俺は男です。」そう言ったら及川は2日寝込んだらしい。

「愛紗ちゃん、この人私達が知らない言葉を使ってるし、服装から見てこの世界の者じゃないよね、剣だって見たこと無い形だしやっぱりこの人が天の御使いなんじゃないのかな？」

「姉者、もしそうだとしたら我々が立ち上がる時なのでは！」

二人は俺を置いて話している。

「あの～、一つ良いですか？」

「ん？何？」

「俺、顔はこんなんだけどれっきとした男だから。」

「「！！！」」

二人が驚くまぁ無理も無い、髪は肩より少し長いし顔もこんなんだ。

「それは本当か？」

「ああ、家の家系で四代前位から女顔の男が多いんだ俺の家族」

「そうなんだ～」

なんだかんだで納得する桃色の髪の少女。

「もう一つ聞きたいんだけど、此処っていったい何処なんだ？」

「ここは幽州だ。」

「幽州・・・・と言う事は中国か・・・・・えっ？中国」

だんだん声が次第に小さくなる俺。

前に一刀から借りた三国志のゲームや本人から聞いたりしたからおおよそ場所は分かる。

「ちゅうごく？」

「悪いけどさ、今一番強い勢力とかある？」

「魏の曹操呉の孫策のどちらかだね。」

「つー事は後漢末期か・・・・・って俺タイムスリップしたのか？オイオイ！！」

でも何時だタイムスリップしたのは？・・・・・・そうだ！あの光に包まれた時タイムスリップしてしまったのか！！

なんで俺がこんなに納得できるかって、それは簡単実際タイムトラベルをした人間の目撃情報などがあるからだ。つーか前にドラマガリ●オでやってたからだ。それにまだ科学では説明できない事もあると思っただけだ。

「ありがとう。じゃ、さよなら」

俺は刀を三本源チャリにくくり、山河崩斬刀を背中に背負いその場を去ろうとした。

あの場に一刀がいたと言う事はアイツもこの世界に来てる確率が高いな探すか。

「待って！！」

「貴方はもしや天の御使いではないですか？」

黒髪の少女が尋ねる。

「ん？天の御使い何？それ？」

「数日前、管櫓と言う占い師がいったのです。近いうちに空から流

星と共に天の御使いが現れる。と」

「で、そこに居たのが貴方なんです。私達は貴方を迎えに来ました。」

「それに、私達が見た事の無い服装や剣、そして言葉。」

「その天の御使いが俺だと言う事なのか？」

「うん。」

「悪いが俺は君達が期待してる様な人間じゃない。」

「いや、そんな事はありません！貴方の目の奥には何かを守りたいと言う気持ちがある目です」

何かを・・・・守るか・・・・・・大切なダチ守れなかった俺にか。

「それに貴方は武芸も心得ている様子。これで決めさせて下さい。私との手合わせで！！」

「分かった」

俺は鞘に納めたままの状態で黒龍と白龍を構える。

「では、参る！！」

黒髪の少女は槍、いや刀を自由自在に操る。

斬撃の一つ一つが重い。だが此処で反撃しなければ！

少女サイド（私の青龍厭月刀をかわしている！！）

俺は高く跳び槍の薙ぎをかわす、そして少女の頭上目掛けて刀を振り落とした。

少女サイド（やられる！！・・・・・私は一瞬目を閉じる。しかし、刀が当った感じがない。私はゆっくり目を開けた）

鞘を付けた白龍は少女の肩まで一センチ位の隙間で刀を止めていた。

「はい、終わり！！」

「なぜですか？なぜ？剣を当てなかったのですか？」

「簡単な事だ、鞘に入れた状態の刀でも辺り所が悪ければ骨折もするだろうと思ってな」

「そうなんだ。」

桃色の髪の少女は納得する。

「で？なんで天の御使いの力が必要なんだ？理由も聞かなけりゃあ？分かんないぜ」

「では、貴方が天の御使いだと言う事を認めて下さるのですね」

「ああ、騙してる訳でもないみたいだしな。手合わせしている時の顔の表情、剣線でな」

少女サイド（それだけで、理解する。この人には驚かされるな・・・・）

「じゃあ、理由聞いても良いか？」

「私達は苦しむ人たちを見て立ち上がろうと思ったのです」

「皆が笑って暮らせる世の中にしたいと思って私達二人で今日まで旅をしてきたんだ」

「私は見ていられない、日々黄巾党が街や村を襲い、罪の無い民が殺されている」

理由がおおよそ掴めてきた。

「可哀想だな」

「なにがです？」

「黄巾党だ。戦乱に翻弄され、争い傷付け合う。・・・・・弱い者は奪われ尽して、奪う奴等も所詮、戦い慣れてない弱い人間から奪わなければ生きられない弱者だ。何時の時代もなかなか来ないものだな平和な世の中は・・・・・。」

「はあ」

「だがな、こんな時代だからこそ義が必要なんだ」

「義、ですか。」

「一人が皆の為、皆が一人の為に何かを成し遂げる・・・それが俺の義だ。」

「「・・・・・・・・・・・・」」

二人はその言葉に黙り込む。彼女達が考えているモノとほぼ同じだと言う事に驚いたのだ。

「どうかしたのか？二人共」

「やはり、貴方は天の御使い様だ。私達が目指そうとしているモノと同じです。

申し遅れました。私は姓は関名は羽字は雲長。真名は愛紗、と言います。以後私の事は真名でお呼び下さい」

「私も愛紗ちゃんと同じ。私は劉備。字は玄徳。真名は桃香。私の事も真名で呼んでいいよ」

「真名ってなんだ？」

「真名とは自分が認めた相手にしか呼ばせない名前の事です」

なるほど・・・・呼んで字の如くか。

「良いのか？俺にそんなの教えて、」

「うん、なんたって私達のご主人様になる人だしね。」

「で？なんでご主人様なんだ？」

「それは貴方様は天の御使い、これから我等の指導者となられるのですから」

ご主人様ねー、及川が喜びそうな感じがするな、いや一刀もありえるな。まっそれでもいっか細かい事は気にしない。

「自己紹介が遅れちまったな。俺は姓は河上。名は大和。字ない。これからよろしくな桃香、愛紗。」

「うん！」

「はい！」

「とりあえず、近くの村まで行こう、まずは聞き込み調査だ。」

俺達は一番近くの村に向かった。

・・・・・・あっ、そういや一刀忘れてた。まあ、あの場所には居なかったしその内会えるだろう世の中広い様で狭いって言うしな。

第一話　出会い（後書き）

最初は一刀も蜀に入れようと思ったのですが、それは何処の夢小説でも見かけるので一刀を別の勢力に入れようと思いました。
この主人公河上大和。つらい過去がある設定です。内容はまだ考え中。
主人公の祖父は十数年前まで宮本武蔵の流派二天一流の道場の師範代をやっていた設定です。

今回、とらドラ！・喰霊と一緒に書いているので何時更新できるか分かりませんが今全力でキーを打ってますのでしばらくお待ち下さい。話はアニメ版の一話で愛紗と鈴々が闘う寸前まで書いていますので、もう少ししたら更新できると思います。　４月２１日

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4801g/

人生と言う迷路

2010年10月14日23時49分発行